

2

二川宿の歴史・まち並み・祭り

(1) 二川宿の成り立ち

二川宿は江戸日本橋側から数えて三十三番目、遠江国とおとうみのくにより三河国に入って最初の宿場でした。慶長6年(1601)、徳川家康が東海道の宿場を設置した当初からの宿と言われており、当初は東西に12町(約1.3km)ほど離れた二川村(二川村元屋敷)と大岩村(大岩村元屋敷)の二村で一宿分の役目をはたしていました。

しかし、両村は離れていたため不都合で、参勤交代などで交通量が増えると経済的に行き詰ってしまいました。そこで、寛永二十年(1643)に吉田藩領から幕府領に移され、翌正保元年(1644)に両村は現在地に移転し、二川と加宿大岩かしょくからなる一続きの宿場町となりました。

二川と加宿大岩では定められた100人の人足と100疋の馬を等分に負担しましたが、加宿であった大岩では旅籠屋を営業して、旅人を泊めることはできませんでした。

二川宿は、東海道五十三次の中では比較的小規模な宿場町で、天保14年(1843)の記録では、加宿大岩を含めて人口で42番目(1,468人)、家数で41番目(328軒)、旅籠屋数では36番目(38軒)でした。宿場内は二川が東から東町、新橋町、中町の3町からなり、加宿大岩は中町、茶屋町の2町からなっていました。まち並みの長さは12町16間(約1,340m)で、2か所に街道を屈曲させた枅形ますがたが設けられていました。



二川村・大岩村の移転と二川宿の成立

江戸時代以前は、二川村と大岩村は梅田川の南(それぞれ本郷の地)にあったと伝えられている。その後、二川村は天正13年(1585)頃に本郷の地から元屋敷へ、大岩村は天正11年(1583)に本郷から元屋敷へ移ったと記録にある。現在地へは、両村とも正保元年(1644)に移転し一続きの宿場となった。

二川宿は
離れていた二つの農村を
宿場の業務のために
計画的につくりかえた町であった



問屋場(荷物の中継場所)の風景

宿場から宿場へ荷物が順に運ばれていった。東海道では53の宿場で荷物を継ぎ送ったので東海道五十三次といわれた。



旅人の風景

大名行列や商人、伊勢参宮の庶民など数多くの人々が二川宿を行き交っていた。



軒の連なる
落ち着いたまち並みが
旅人たちを迎え入れていた

(2) 二川宿のまち並み

計画的に建設された二川宿は、間口が狭く奥行き
の長い宿場町特有の宅地割りが行われ、街道に
沿って家々が軒を連ねていました。また、寺院や神
社は比較的土地の高いまち並みの北側ににつくら
れました。本宿である二川には、東から東町、新橋町、
中町の3町が並び、江戸時代後半には新橋町の
北側に瀬古町が形成されました。宿場の中心は中
町にあり、本陣、脇本陣、旅籠屋などの宿泊施設
や、人馬の継立を行う問屋場などが集中していま
した。宿場の東の入口には江戸より72里目の一里塚
があり、榎の木が植えられていました。

一方、加宿大岩は、東から中町、茶屋町の2町が
あり、中町には問屋場があり、茶屋町の西端には立
場茶屋が置かれていました。



日差しをこのま
雨宿りのできる軒下は
人々にやすみを与えていた



二川宿絵図(江戸時代後期)

街道沿いに建ち並ぶ家々や2か所の枡形、街道北側の寺社が描かれている。この図では、本陣、脇本陣、旅籠屋などが集中していた宿場中央付近に瓦葺きの家が多かったことが分かる。



①二川駅付近から東を望む：昭和27年(1952)頃
宿場町の前後にあった松並木の面影が残っている。通り沿いには、明治期から栄えた製糸業の建物が見られる。



②旧宿場の西入口から東を望む：昭和34年(1959)
江戸時代、宿場の西入口であったこの付近は、茶屋町といい旅人を相手とする立場茶屋があった。



③大岩町字西郷内より西を望む：昭和33年(1958)
大岩神明宮の前を流れる宮川に架かる橋が見える。切妻平入り*のまち並みが続いている。



④大岩町字東郷内より西を望む：昭和34年(1959)
オート三輪が走るのどかな通り。右のレンガ造りの壁は現在でも見ることができる。



古写真の位置図



⑤西の枡形 西から東を望む：昭和33年(1958)
 まだ車の往来が少なく、通りは人々の生活の場としてにぎわっていた。
 江戸時代には、ここに高札場(幕府などが禁令などを板札に書き掲示した場所)があった。



⑥西の枡形 東から西を望む：昭和33年(1958)
 ほとんどの建物が切妻平入り*で、所々に新しい形の店などが建ち始めている。通りには子供たちが自由に歩く様子が見える。



⑦東の枡形 西から東を望む：昭和34年(1959)
 左端の建物は、「駒屋(市指定有形文化財)」、その横に建ち並ぶ複数の建物は、味噌・醤油の製造販売をしていた「東駒屋」。

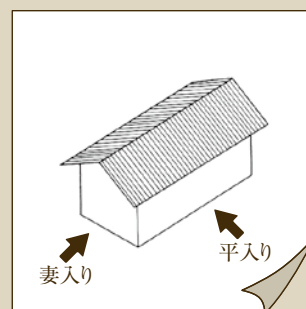


⑧東の枡形 東から西を望む：昭和34年(1959)
 当時はまだ、枡形が直角に曲がっていたため、正面の家で街道の向こうが見えにくい状態であった。その後、車社会の到来により、枡形は、車が通行しやすいように斜めに拡大され、現在の形になった。



⑨東町の風景 昭和50年代
 切妻平入り*の建物が、軒を連ねて建ち並んでいる。現在でも当時の面影が最も残っている町である。

※切妻平入り
 切妻屋根の入口の位置で次のように呼ぶ。



時が流れても
 切妻平入りのまち並みは
 大切に引き継がれてきている



市指定史跡 二川宿本陣

大名や公家などの宿であった本陣。宿場町の中で最も間口が広く、端正なつくり。格式高い表門は本陣のみに建築が許されていた。



二川宿本陣の土蔵

しっくい白壁と黒い板壁が、引き締まった印象を与えている。

落ち着いた色合いの家々に
軒や格子が陰影をつくり
旧宿場町の風情を醸し出している



「駒屋」の土蔵

分厚い土壁の重厚な造りでありながら、しっくいと板壁の明暗の使い分けにより洗練された印象を与えている。



市指定有形文化財 旧商家「駒屋」

江戸時代に質屋や米穀商を営んでいた由緒ある商家。高さを抑えた大屋根と繊細な格子が古きまちの情緒を漂わせている。



市指定有形文化財 旧旅籠屋「清明屋」(左の建物)

庶民の宿であった旅籠屋^{はたごや}。落ち着いた瓦葺きの屋根と、木やしっくいを巧みに組み合わせてつくられた壁面が美しい。



国登録有形文化財 西駒屋

二川宿本陣の正面にある味噌・醤油の製造販売所で、本陣とともに風格あるまち並みをつくりだしている。



東の枅形から北に延びる瀬古道

幅約一間の道の両側に駒屋などの外壁が迫り、往時を彷彿とさせる。かつては、松音寺への参道として人々に利用され、道の途中に瀬古町が形成されていた。



東駒屋の建物群

街道に沿って明治から大正時代の建物が建ち並んでいる。古くから味噌・醤油を製造販売していたところで、敷地内には醸造業に使われていた歴史的建造物が残されている。



年に一度
落ち着いたまち並みを背景に
華やかな山車が繰り出し
まちが最も美しくなる時を迎える

(3) 二川宿の氏神と祭り

当初は離れた村であった二川と大岩は、それぞれ別の氏神を祀り、二川は「二川八幡神社」、大岩は「大岩神明宮」で、それぞれ毎年10月に例祭がおこなわれます。

■ 二川八幡神社

二川八幡神社は1295年に鎌倉鶴ヶ岡八幡宮より勧請して以来、二川の氏神として祀られています。境内には本殿・拝殿・舞台があるほか、宿内の人々が寄進した灯籠が今も残っています。10月の例祭では江戸時代の末期から続いているといわれる御輿渡御がおこなわれ、御神体を載せた御神輿が多数の従者と3台の山車を従えて町内に繰り出します。市内で山車がでるお祭りとしては、最も歴史のあるお祭りと言われています。

② 二川八幡神社の例祭の3台の山車



● 中町の山車



● 新橋町の山車



● 東町の山車

③ 3台の山車の飾り



● 中町：和藤内とぼたん

浄瑠璃の主人公の和藤内がもろ肌をぬぎ見栄をきった格好で立ち、手前の菜振り唐子が手足や首を振って愛嬌をふりまきます。



● 新橋町：小野道風と蛙

屋根から垂らした柳の枝に蛙がとびつき、道風は蛇の目傘をさし思案顔の表情です。手前の神主が幣を振ります。



● 東町：うさぎの餅つき

月と雲を背景に二羽のうさぎが杵をかざして餅をついています。新橋町同様、手前の神主が幣を振ります。



例大祭の午後

東の枳形^{ますがた}などで世代を越えた舞が繰り広げられる。



二川八幡神社の境内



山車の明かりと
提灯の暖かな光が
軒先と繊細な格子を
美しく浮かび上がらせる



例祭の夜

西の枳形をはじめ3箇所^{はやし}で3台の山車^{せあ}が集まり、お囃子の競り合
いで祭りは最高潮に達する。

街道から
僅かに下がった
軒下の空間は
祭りを見物する
特等席になる

境内に噴きあがる
力強い天筒花火の姿が
大岩のまちを活気づける

■ 大岩神明宮

大岩神明宮は698年に岩屋山南麓^{かんじょう}に勧請^{かんとく}したことに起源を持ち、大岩の氏神となっています。境内には本殿・拜殿があり、今も燈籠^{とうろう}や手水鉢^{ちゆうずばち}などといった江戸時代から残るものもあります。また、毎年10月には例祭^{れいさい}が開催され、御神楽奉納^{おみくら}、子供御輿^{みこし}などのほか、東三河の伝統である手筒花火奉納も行われます。



大岩神明宮拜殿



手筒花火奉納

天を焦がす天筒花火が祭りを盛り上げる

蚕都豊橋を支えた
玉糸製糸は
大岩から始まった

(4) 新たな産業による繁栄

■ 製糸業

明治以降にこの地域を支えた産業は製糸業でした。小淵志ちが大岩町に糸徳社を設立し玉糸^{*}製糸の商品化に成功。糸徳社を始め多くの製糸工場が旧二川宿周辺に建設されました。現在、製糸工場は無くなりましたが、当時の女工さんが通っていた衣料品店や菓子店、美容室などが残り当時の様子を感じさせます。



小淵志ちと糸徳社



玉繭選別場



繰糸工場



玉糸検査及び結束場



二川地区市民館にある糸徳工場跡の碑

^{*}二匹以上の蚕が作った1つの繭のことを玉繭といい、その繭から取った節のある糸のことを玉糸という。